

上座部の共業 (sādhāraṇa-kamma) について

——聖典からブッダゴーサへ——

林 隆 嗣

James Paul McDermott, “Is There Group Karma in Theravada Buddhism?,” *Numen* 23, 1976, pp.67–80 の問題提起以来、原始仏教や上座部における共業の観念をめぐって様々な試みがなされてきた。しかし、これまで文献学の分野では、国王の悪政による異常気象や釈迦族の滅亡といった具体的なエピソードから集団的行為や業果の共有を検討するといった研究に留まっていた。近年、器世間や共業の概念の成立を考察するために阿含経典から説一切有部をはじめとする諸部派のアビダルマ文献を調査した佐々木閑「仏教の自然観」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』20, 2006, pp.19–35 によって、「共業」(sādhāraṇa-kamma) の語がパーリ・アッタカターに現れることが初めて指摘された (p.27) ばかりであり、上座部の思想体系を詳細に伝えるアビダンマや後代の註釈文献に基づいた共業の本格的な調査研究が待たれている。本稿では、生き物たちが共に享受する環境世界が何によって形成されると上座部の中で考えられてきたか、また共業 (sādhāraṇa-kamma) という概念はいつから上座部に受け入れられ、どのような意味範囲で使用されてきたのかという視点から、聖典アビダンマから、蔵外文献、『解脱道論』、ブッダゴーサに帰せられるパーリ註釈文献へと順を追いながら、観念や解釈の変遷を明らかにする。

1. 聖典アビダンマ

従来、器世間と共業に関する上座部の立場を示すために、*Suttanipāta* 654 偈を引用する *Kathāvatthu* (Kv) xvii.3 (Sabbam idaṃ kammato ti kathā) がしばしば紹介されてきた。しかし、ここでは「すべてが業による」という王山部・義成部 (Kv-a 164) と上座部との論争が記されているものの、そのテーマは器世間の問題とは異なっており、一連の議論のなかで、物理的な環境世界について触れることはない。この問題に関して我々が参照すべき議論は、むしろ Kv vii.7 (Paṭhavi Kammavipākakathā) である。ここでは、「大地は業の異熟である」とするアンダカ派 (Kv-a 100) に対して、まず上座部は、もしそれが業の異熟であるなら、色法

である大地が苦樂の感受と相応するのか、心心所と相応するのか、対象を有するのかといった教理的な問題から矛盾を追及していく。

[大地は] 安樂を感受すべきもの、苦しみを感受すべきもの、不苦不樂を感受すべきもの、安樂な感受と共に結びついたもの、苦しい感受と共に結びついたもの、不苦不樂の感受と共に結びついたもの、接触と共に結びついたもの、感受と共に結びついたもの、概念化作用 (saññā) と共に結びついたもの、意思と共に結びついたもの、心と共に結びついたもの、対象を有するものであって、それには引転 [心]、[対象に対する] 意向、[対象への] 專注、注意、意思、願望、誓願があるのか? (Kv 349)

Kv においてこの問いは定型化しており、何であっても色法を異熟とみなす論争相手に対して上座部側は必ずこの質問を投げかける¹⁾。つまり、上座部のアビダンマでは、「異熟」(vipāka) という概念は特殊な専門用語であって、89種類の心体系のうちの異熟心のみに限定される(欲界無因の不善異熟心7種・善異熟心8種、欲界有因の異熟心8種、色界異熟心5種、無色界異熟心4種、出世間異熟心4種)。そのため、一部の色法(身体の一部)が業によって生じることを認めつつも、彼らはそれらを「異熟」とは決して呼ばない²⁾。

この議論では、タイトルが示すように、「自然環境である大地が業の異熟か否か」がポイントであって、大地の発生原因が善悪の業なのかどうかは本来の趣旨からすれば関係ないことである。しかし、議論はここから果報の共有や集団的行為という話題に移っていく。上座部側が指摘する問題点や矛盾点は、以下の四つのポイントに整理することができる。

① 業果の分割、譲渡、共有 「大地は伸ばしたり引きついたりするのにふさわしいか、切断したり分断したりするのにふさわしいか?」(paṭhavī pagghaniggahūpagā chedanabhedanūpagā ti?)、「大地は買ったり売ったり、担保として置いたり³⁾ 取り立てたり手放したりできるのか?」(labbhā paṭhavī ketuṃ viketuṃ āṭhapetuṃ ocinituṃ vicinituṃ ti?) と上座部は問う。つまり、大地(領土、所有地)は拡大縮小分割分断され、不動産として売買されたりするが、善悪の行為の結果である異熟であれば、それは不可能である。さらに続けて、「大地は他人たちと共有するものか?」(paṭhavī pacesaṃ sādhāraṇā ti?) と問いつつ、業異熟の共有(sādhāraṇa)が可能かどうかと論難する。そこでは、

asādhāraṇaṃ aññesaṃ, acoraharaṇo nidhi / kayirātha macco puññāni sace sucariṭaṃ care //

[福德は] 他の者たちと共有しないし、盗賊にもっていられない伏蔵(財産 nidhi)である。

死すべき人は諸々の福德をなすことになる、もしも彼が善行を行なうとしたら⁴⁾。という偈を引用して、業果の不共有、自業自得の原則を再確認させている。この偈は、註釈 (Kv-a 100) に「他の教義から引用して示したもの (parasamayato āharitvā dassitam)」と、上座部 (大寺派) の聖典には存在しない偈であることが明記されている。確かにパーリ聖典にはこのままの偈は見出せないが、実はこれとそっくりな偈が *Khuddakapāṭha* (Khp viii.9) に存在する。

asādhāraṇam aññesaṃ, acorāharaṇo nidhi / kayirātha dhīro puññāni yo nidhi anugāmiko //

[福德は] 他の者たちと共有しないし、盗賊にもっていかれない伏蔵である。

賢者は諸々の福德をなすべきである。およそ伏蔵は、[彼に] について行くものである。

ここでは c pāda の一語と d pāda が異なっているが、Kv の論者が用いた偈は明らかにこれの異形である。

②業と果報の順序 次に、上座部は「最初に大地が確立し、後から生き物たちが生まれるのか？」(paṭhamam paṭhavi saṅṭhāti, pacchā sattā uppajjanti?) と問う。世界の生成において大地が先に出来上がって、その後でそこに誕生する生き物が行動し業を作っていくのだとすると、業と果の順序が逆になるので矛盾が生じる。

③業果の不受 第3は「大地はすべての生き物たちの業異熟なのか？」(paṭhavi sabbasattānaṃ kammavipāko?) という問いである。あらゆる生き物の業が集まった結果として大地があるなら、大地という場に再生することがない生き物たちは自分の業果を受けないことになってしまう⁵⁾。

④転輪王の業果 最後は「大地は、生き物である転輪者 (転輪王) の業異熟なのか？」(paṭhavi cakkavattisattassa kammavipāko?) という問いである。生き物全体の業の結果ではなく転輪王一人の業の結果として世界 (領土、国土) が得られたとするなら、そこに生きる他の多くの生き物がそれを受用しているのは矛盾する。

「共業」という言葉は、上座部の聖典を見渡しても見当たらず、集団的行為や果報の共有を論じるこの Kv の議論でも使用されないが、註釈が「大地、海、太陽、月なども、すべての者たちにとって共業の異熟であるというのが彼らの執見である」(Kv-a 100: pathavisamuddasūriyacandimādayo pi sabbesaṃ sādhāraṇakammavipāko ti tesam laddhi) と述べるように、アンダカ派がこの時代に「共業」を主張していたとすると、これがパーリ上座部 (大寺派) における最も古い共業の議論と言えらるだろう。

一方、部派のなかでも説一切有部では『大毘婆沙論』の段階から、共業による増上果として非生物の環境世界 (器世間) の生成が説かれており、共業をめぐる若干の議論も記されている⁶⁾。さらに時代は下るが、AD3-4 世紀の『成實論』

も大地や日月など環境世界の生成が共業によると説いている⁷⁾。ついでながら、チベット訳 *Samskṛtāsamskṛtaviniścaya* (Sav) において、正量部説を述べる箇所でも「生き物たちの共業」(sems can rnam kyi thun mong gi las) から生じた雲が雨を降らすと述べられている⁸⁾。このように、アンダカ派以外にも共業を用いて環境世界を説明する部派が存在することから、共業は広く仏教徒に知られていた観念であったと推察できる。

2. 初期パーリ蔵外文献

一方、共業を認めない上座部において、それに代わる世界形成に関する解釈を示したのは初期蔵外文献 *Milindapañha* (Mil) からである。

大王よ、およそ何であれ、意思(心)のある生き物たちはすべて業から生じるもの、火とすべての種子とは因から生じるもの、大地と山と水と風はすべて時節から生じるもの、虚空と涅槃というこの二つは業生起でもなく因生起でもなく時節生起でもないものである。(Mil 271)

この説明では、大地や山のような自然環境は、生き物たちの業の結果ではなく、時節生起 (utuja), つまり自然のサイクルのなかで起きる単純な物理現象である。Mil の分類は、註釈文献における色法発生の分類と比べると未熟なものだが、ここで示された時節生起の考えが後の上座部に継承されていくことになる。

3. アバヤギリ派

現存する上座部文献のなかで「共業」という用語がアバヤギリ派の『解脱道論』(Vim) において最初に登場するという重要な文献的事実はこれまで見過ごされてきた。

云何んが共業を因と為す。地、雪山、海、日、月の如し。復た説有り、此れ共業は因に非ず。是の諸の色心法は時節を因と為し、共業有ること無しと。世尊、偈を説くが如し。「業は他と共にせず、是れ蔵して他は偷せず。人の作す所の功德は 其れ自ら善報を得る。」(T1648, vol.32, 451c11-15)

Vim は縁起に関連して物事の発生の仕方を考察し、業・煩惱、種、有作(神通の行作)、共業という四種の原因を挙げる。そして共業因生起として「地、雪山、海、日、月」といった具体例を示している。この漢訳語「共業」の原語が sādhāraṇa-kamma/karma であることは、Sav における対応語 (thun mong gi las) から確認できる。しかし、時節を原因とするという別の説(復有説)によって共業説は即座

に否定され、それが仏説に反することを示すために偈が引用される。この偈は上記の聖典 Khp viii.9 に遡り、Kv で「他の教義から引用した」偈と一致することから、Vim が Kv vii.7 の議論を前提にしていることは疑う余地がない。しかもこの後者の説は Mil が示した utuja という新解釈を正しく継承したものである。しかし、対応するチベット訳 Sav 第 14 章では後半部分がなく、共業説の立場を主張するかたちとなっている。

共業を原因として生じたものは、大地、雪山、海、月、太陽などである。(Q104b8-105a1, D189b3-4)

Sav の作者ダシャバラシュリーミトラの手元にあった資料がこの通りだったのか、彼が意図的に後半部を削除したのかは分からない。アバヤギリ派内部で異説が混在していたのかもしれない。あるいは、時代の経過とともに解釈が変化し、最初是否定的だったアバヤギリ派も共業を認めるようになった可能性も考えられる。しかし、いずれにせよ、それまでの上座部文献で全く使用されなかった「共業」の概念を Vim が紹介したのは、スリランカにおいて保守的な大寺派とは異なり、アバヤギリ派が積極的にインドの仏教僧を受け入れて様々な部派や大乘と交流を持っていたという歴史文献の記述を裏づける一つの事例と言えらる。

3. ブッダゴーサに帰せられるパーリ註釈文献

上座部大寺派では、少なくとも *Visuddhimagga* (Vism) 及びブッダゴーサに帰せられる註釈文献において sādhāraṇa-kamma の語も集团的行為や果報の共有についての議論も見られない。では、生き物が共存する環境の発生はどのように説明されるのだろうか。

大寺派は、物理的現象世界の体系を構成する基本要素として 28 色を認める。さらにそれらの発生 (等起 *saṃutṭhāna*) については、業・心・時節・食の観点から分類する。ただし、28 色はあくまで原理的な要素であって、現象界の個々の発生に関しては、この四種等起に四種の縁 (*paccaya*) を組み合わせて説明する。聖典 *Dhammasaṅgaṇi* の註釈書 *Aṭṭhasālini* (As iv.118) における分析から外的環境や自然界の現象に関する発生を抜き出すと、業縁時節等起 (輪宝、神々の園、天宮など)、時節等起 (雲)、時節縁 (洪水)、時節縁時節等起 (降雨による種子の生育、大地の放香、山の緑化、海の増水) に絞ることができる。また、Vism xii.100 (cf. Paṭi-a i.350) でも山や樹木などの自然の事物は時節等起としている。環境世界が神の創造でもなく、生き物の活動 (業・心・食) が原因でもなく、寒暖の状態⁹⁾ とその変化を基

本とする純粋な物理的法則「時節」によって生じるものであるという見方は、Mil/Vim から継承したものと言える。ただし、このなかで「業縁時節等起」に分類される内容は、日常的な自然現象ではない事例ばかりである。業を縁として時節等起する現象とはどのようなものか、ブッダゴーサに帰せられるパーリ註釈文献で確かめてみよう。

①< 転輪王の輪宝 > Mahāsudassana-sutta と Bālaṇḍita-sutta において、スダッサナ王が有する七宝が説明される。その一つ、転輪王だけに出現する輪宝 (cakkaratana) の詳細な描写をする箇所、註釈はそれが業縁時節等起によるものだと述べている。

(伝え聞くところによれば、そのとき王は早朝に十万金を喜捨し、大布施を行なった。そして十六種の香水の瓶で頭を洗い清めたあと、朝食を終え、清らかな上衣を一方の肩に着け、高樓の吉祥の臥坐で結跏趺坐を組み、自己の布施などからなる功德の全体に意を傾けて坐った。) これはすべての転輪王たちのならわし (決まり) である。彼らがそれにじっと意を傾けていると、既述の仕方で福業を縁として時節から等起する、ブルーサファイヤの集まりにも似た、天の輪宝が、東の海の水面を破るかのように、虚空を荘嚴するかに現れる。(Sv ii.617, Ps iv.215)¹⁰⁾

出現した輪宝に水を注ぐと、それは東から順に四方の海まで進む。転輪王は輪宝につき従って進軍し、各地を支配下に治め、最終的に大地を征服するとされる。ブッダゴーサは、この特殊な能力を備えたアイテムを業縁時節等起とみなす。

②< 宝石の地面 > Brahmajāla-sutta において六十二見のうちの「部分的常住論」(ブラフマーのみ永遠、その他は非常住) では、Aggañña-sutta と類似した世界の破滅と再生が語られる。世界が滅亡する時に生き物たちは第二禪の光音天 (Ābhassara) に転生し、そこにしばらく留まる。そして、長い年月のあとで世界が再生する時、まだ誰もいない「空っぽのブラフマー宮殿」が最初に出現する。ブッダゴーサは、それについて次のように説明する。

「空っぽのブラフマー宮殿に」とは、元々は、[そこに] 転現していた生き物たちがいないことから空っぽである。ブラフマー集団 (梵衆天, 梵輔天, 大梵天) の地が転現するという意味である。それには作り手も、作らせた者もない。Visuddhimagga で言われた道理で、業を縁として時節から等起する宝の地が転現する。そして、元の再生の場どもと同じように、ここに園・カッパ樹などが転現する。このとき、生き物たちには、元々住んでいた場所に対する願求が生じる。(Sv i.110)

ここで、生き物が再び転生する場である宝の地面 (ratanabhūmi) が、業縁時節等起であると述べられている。さらに、上記の As において「神々の園、天宮な

ど (devatānaṃ uyyānavimānādini)」が例示されていることを鑑みると、ここではブラフマー宮殿や園やカッパ樹などもみな業縁時節等起とみなしてよいだろう。

③<アスラの住処> 神々との争いに敗れたアスラが三十三天を追放され、シネール山の麓にある「アスラの住処 (Asurabhavana)」と呼ばれる地 (宮殿) に移り住むエピソードはパーリ註釈文献でしばしば語られる。なかでも SN の註釈には業縁時節等起が明記されている。

このとき、彼らには、業を縁として時節から等起する、シネール山の最下の平地における一万ヨージャナのアスラの住処が生じた。(Spk i.338)

ここでは、業縁時節等起の居住地が、アスラたちに生じるとあるが、さらに *Dhammapada* の註釈¹¹⁾ によると「福德の威力」によるとされている。

大地や山や海といった環境世界が「時節」(utu) によって形成されるという Mil/Vim 以来の解釈は、客観的に観察可能な自然に対する註釈家の合理的な姿勢を示していると言えよう。その一方で、日常の経験世界とは異なる、特殊な現象や宗教的な信仰によって描き出される環境の生成を説明するために、ブッダゴースは「業縁時節等起」という表現を用いた。そこにいる生き物がその特殊現象を共有するという点では、この「業縁」の業はほとんど共業である。つまり、輪宝は転輪王の勝れた業を縁として出現したものであろうし、宝の地面もアスラの住処もそこに生まれてくる生き物たちに共通する特有の業の関与を示唆している。アンダカ派に言及する Kv-a がブッダゴースの著作か否かは別としても、彼は当時の常識として sādhāraṇa-kamma という術語を知っていたであろうが、彼に帰せられる文献群には一切この言葉が使用されないのは不自然なほどである。そこには、聖典アビダンマの立場を堅持する註釈家ブッダゴースの頑なな姿勢と同時に、特殊なケースでは集団的な業の関与を認めざるを得ないとしても、それは原因ではなくあくまできっかけ (paccaya) にすぎないのだという苦しい妥協が見てとれるようである。

(付言) ダンマパーラに帰せられる文献群 (註釈、復註) において sādhāraṇa-kamma の語が使用されるようになるが、ブッダゴース以降の展開については別の機会に検討する。

1) 同じ質問が、色法である声を異熟とする大衆部との論争 (Kv xii.3)、眼など業から生じる六処を異熟とする大衆部との論争 (Kv xii.4)、異熟の色法を認めるアンダカ派・正量部との論争 (Kv xv.8) に見られる。林隆嗣「南方上座部における業の機能—janaka-kamma が生み出すもの—」『佛教学』42, 2000, pp.4-6 及び Hayashi, Takatsugu: “The Function of Janaka-Kamma in Theravāda Buddhism,” *Buddhist and Indian Studies In Honour*

of Professor Sodo Mori. Kokusai Bukkyoto Kyokai, 2002, pp.190–193 参照.

- 2) 共業を認め、異熟色という観念をもつ有部においても「異熟」は教理的な用語であって、例えば『大婆沙論』(T1545, vol.27, 102b14–17)では、欲界善業が一劫の間与える異熟はないことを説く中で、器世間を例にあげる。四洲やスメール山はどうかと反論する相手に対し、それらは異熟果ではなく増上果だからと却下する。佐々木 2006, p.22 参照。
- 3) NPED (s.v. *āthapeti) によると、用例はこの箇所と Vinaya 註にあって、経済的な契約に関する用語として特殊な文脈でのみ使用されるようである。
- 4) 学会発表時に、この偈の解釈について貴重なご助言を賜り、『解脱道論』の引用偈と一致することをご指摘頂いた東北大学教授、後藤敏文先生に感謝いたします。
- 5) さらに、大地に生まれず般涅槃することがあるなら、受けるべき業異熟を残したまま般涅槃することになってしまうという問題も挙げられている。般涅槃者と共業による器世間という観念の矛盾についての議論は婆沙論にもある。佐々木 2006, p.22 参照。
- 6) 「然るに有情数は各別の業生にして、非有情数は共業の所生にして、自在等の邪因の所生には非ず」(41b4–5)。「此處所において共業の増長すれば、世界は便ち成じ、共業もし盡れば、世界は便ち壊す」(692c17–18)。その他、詳細な事例については佐々木 2006 を参照。
- 7) 「問曰。是の衆生数の物は則ち先業によりて生ずるや。答曰。然らず。非衆生数の物も亦、業をもって本と為せばなり。一切衆生に共業の報果あり。謂く、住處を得るに、業因縁をもつての故に地等あり。明の業因縁を得るをもつての故に日月等あり。まさに、物の生ずるは皆、業をもって本と為せばなりと知るべし」(T1646, vol.32, 296c28–297a3)。「問曰。若し、一切萬物は皆、共業の所生ならば、劫盜は何故に罪を得るや。答曰。共業の因より生ずと雖も、因に強弱あればなり。若し、人が業因の力強く、又た、勤めて功を加えるならば、此物は則ち屬すなり」(304c16–18)。
- 8) Kiyoshi Okano: *Sarvaraśītas Mahāsaṃvartanīkathā, Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāmmīṭṭya-Schule des Hinayāna-Buddhismus*. Sendai 1998, p.400, p.402 および岡野潔「大いなる帰滅の物語」(Mahāsaṃvartanīkathā) 第2章1節～3節に見る世界形成の正量部伝承」『哲学年報』66, 2007, p.10, p.13 参照。ただし Skt 文献 *Mahāsaṃvartanīkathā* では対応箇所での語は使用されていない。
- 9) Vism xx.40: uṇha-utu sīta-utū ti evaṃ pan' esa duvidho hoti; also Vism xx.69: utumayaṃ sītuṇhasena pākaṭaṃ hoti.
- 10) 類似した説明は、同じくブッダゴーサに帰せられる Khp-a 172 にもある。
- 11) Dh-p-a i.272: atha nesam **puññānubhāvena** Sineruno heṭṭhimatale asuravimānṇi nāma nibbatti Cittapāṭali nāma nibbatti. このとき、彼らには、**福德の威力によって**、シネール山の最下の平地にアスラ宮殿と名づくるものが生じ、チャッタータリ [樹] と名づくるものが生じた。

〈キーワード〉 共業, 器世間, *Kathāvatthu*, 『解脱道論』, ブッダゴーサ

(こども教育宝仙大学教授, Ph.D.)